

## 学位論文題目：「性暴力と被害者の属性—性風俗従事者に対する性暴力の不可視化—」

田中麻子著『不可視の性暴力 —性風俗従事者と被害の序列—』

(2016年、大月書店より刊行)

### 本研究の問題意識と課題

性暴力は他の犯罪に比べて被害申告率が低く暗数の多い犯罪であり、性暴力被害者は被害について相談することができないだけでなく、必要な支援を受けられない場合も多い。このような状況を打開するものとして、近年日本では、性暴力被害者支援に関する法制度の整備や被害者支援制度の拡充が進んでいる。また、犯罪被害者学や心理学、社会学を中心に、「被害者非難」についての研究も進み、性暴力被害者が被害について語るができない背景に、被害者の属性（人種や性別、職業など）や被害者と加害者の関係、被害の期間などが関わっていることも明らかになっている。

これらの動向は、被害者の身体的・精神的負担や、性暴力被害を語りづらい背景、どんな属性を持つ被害者が非難されてしまうのかを明らかにしてきた。しかし、ある属性がなぜ非難の対象となり、それらの属性を持つ被害者に対する性暴力がなぜ是認されるのかといったことは体系的に分析されておらず、それらの属性を持つ被害者に対する性暴力を可視化する方法の模索には至っていない。そこで本研究では、性暴力被害者が被害について開示できない要因を、被害者の属性との関係から分析し、性暴力被害者がその属性に囚われることなく被害を相談できる（可視化できる）方法を考察する。その際、日本の「性風俗従事者」に対する性暴力に着目する。本研究が日本の「性風俗従事者に対する性暴力」に着目する理由は、性風俗従事者に対する性暴力についての語りはその信憑性を問われやすく、また、「社会的な問題」だと考えられていないからである。

可視化されづらい性暴力は多様に存在するが、本研究ではその一つとして性風俗従事者に対する性暴力に着目し、被害者が「性風俗従事者である」という属性ゆえに性風俗従事者に対する性暴力が正当化され、その属性ゆえに性暴力被害を訴えられないような状況を分析することで、性暴力の不可視化と被害者の属性との関係を明らかにし、性暴力被害者が被害を可視化できるような環境を模索する。

### 本研究の構成

第1章では、本研究の方法論を提示する。本研究における「性暴力」と「性風俗」の定義、資料の選定方法、本研究で実施したインタビュー調査方法を説明する。また、同章では、「性暴力の不可視化」についての先行研究を基に、本研究の分析枠組みを設定する。性暴力が可視化される過程には、性暴力の概念化と個人の経験の再定義化（「性暴力被害者」への同一化）、他者への開示という三つの可視化の過程／方法がある。性暴力が可視化されるには、性暴力が概念化され、従来「個人の不快」や「からかい」などと受け止められてきた出来事が「暴力」の一形態に位置づけられる必要がある。そして、個人が自分に起きた出来事を「性

的行為」ではなく「性暴力」として認識し、自身を「性暴力被害者」に同一化することで、性暴力は被害者自身に可視化される。つまり、性暴力が概念化されることで「性暴力」という問題が可視化され、さらには、被害者が自分に起きた出来事を語るための言葉を得て、出来事を可視化する力を得る。しかし同時に、性暴力が概念化される過程では、性暴力被害の語りが第三者から否定されたり、反対に「性暴力被害者」が名指しされたりする危険性や、「共通課題」として概念化される「性暴力」問題が抱える内部の差異が不可視化される危険性もある。同章では、このような「性暴力」の可視化の可能性と危険性を整理した上で、本研究における「性暴力の可視化／不可視化」の意味を明らかにし、性暴力の不可視化を被害者の属性との関係で分析する方法を考察する。

本研究では、性暴力被害者が非難されるメカニズムや性暴力の信憑性が問われやすい状況についての研究を進めてきたレイプ神話研究と被害者非難研究を参照する。さらに、性暴力の不可視化と被害者の属性との関係を分析するために、「スティグマ」概念を考察する。性暴力の信憑性が疑われ、性暴力の責任が被害者のみに問われ、そしてある個人に性暴力を行使することが是認される背景には、被害者の属性のスティグマ化がある。スティグマ化とは、ある属性を逸脱や異常と見なして差異化し、その属性を持つ者に差別や偏見、暴力を向けることを正当化することである。スティグマ化された者に対する性暴力の原因や責任が「被害者がスティグマ化された属性を持つこと」に帰されることで、その被害者に対する性暴力が是認される。さらに、そのようなスティグマ化を被害者が内面化することによって、性暴力被害者自身が、性暴力が起きた原因を自身の属性に帰し、性暴力を属性に対する教訓や制裁と捉えて不可視化してしまうこともある。つまり、ある属性のスティグマ化は、その属性を持つ被害者に対する性暴力を第三者が不可視化するのを促すだけでなく、スティグマ化を内面化した被害者自身による性暴力の不可視化をも促すのである。同章では、これらの先行研究を基に、本研究の分析枠組みを設定する。

第2章では、「性風俗従事者に対する性暴力」の概念レベルの不可視化を検討する。すなわち、「性暴力」についての先行議論を整理することで、「性風俗従事者に対する性暴力」の概念化の過程を明らかにする。「性暴力」が、「風紀の乱れや家父長の恥」から「被害者の性的権利の侵害や被害者の苦悩」として概念化され、被害者の性的自己決定権や精神的負担についての認識が高まったことは、「性風俗従事者に対する性暴力」の概念化とも無縁ではない。しかし、「性風俗は何かしらの強制の結果である」ことを前提とする議論では、「性風俗に従事すること」が「性暴力に遭うこと」と同義のように議論され、性風俗に従事することの結果が「傷ものになる」などと抽象的に語られ、性風俗従事者に対する性暴力の具体的な内容や影響が不可視化される危険性があった。また、性風俗が内包する性差別や性的搾取、あるいは性風俗で起こりうる様々な暴力についての議論が、性風俗従事者が強制されて性風俗に従事しているのか、自由意思で従事しているのかを軸に展開される場合は、自由意思で従事する性風俗従事者に対する性暴力の原因が、性風俗従事者が「性風俗に従事することを選択した」ことに帰されやすく、性暴力加害者の存在やその責任が不可視化される危険性

があった。同章では、このような先行議論の「性暴力」の概念化の可能性と危険性を整理し、「性風俗従事者に対する性暴力」が現在どこまで明らかになっているのかを整理する。

第3章では、先行調査や性風俗従事者の手記、ルポなどの資料を基に、性風俗従事者に対する性暴力を体系的に整理し、分析する。まず、海外調査と国内調査を基に、性交強要や言葉による嫌がらせなど、「性風俗従事者に対する性暴力の内容」を明らかにする。さらに、性風俗の形態や性風俗従事者のジェンダーによっても、被害の内容や被害率が異なることを示す。次に、「性風俗従事環境に組み込まれた性暴力」を明らかにする。性風俗従事者に対する性暴力には、性風俗従事環境に組み込まれているために、「暴力」ではなく「性的サービス」の一環としてしか認識されていないものがある。その主なものとして、性風俗に従事する前に実施される「講習（性風俗店のルールを確認するロール・プレイ）」と「避妊具無しの性的行為」を取り上げ、それらが「性暴力」になりうる可能性と、「性暴力」として認知されづらい背景を分析する。その後、「性風俗従事者を取り巻く環境」について考察する。性風俗従事者を取り巻く経済的背景やジェンダー構造、性風俗従事者の性的トラウマや周囲の人々の影響は、性風俗に従事する意思の無かった人を性風俗に導いたり、性風俗における性暴力に対する脆弱性を高めたりすることがある。ここでは、性風俗従事者を取り巻く環境と对人的な性暴力との繋がりを明らかにする。最後に、「性風俗従事者の抱える身体的・精神的負担」を考察する。ここでは、特に日本の性風俗議論が、性風俗に従事することを「人格が崩壊する」などと抽象的に議論してきたことの問題を指摘した上で、性風俗従事者が慢性的に抱えている身体の不調や精神的負担（鬱症状やリスク行動など）を分析する。

第4章では、「性風俗従事者に対する性暴力が不可視化される文脈」を考察する。まず、性風俗従事者が性暴力被害を語る環境が整っていないことを明らかにする。この主なものとして、性風俗産業の回転が早いために被害を訴える相手や場を見つけにくいといった「性暴力被害の告発対象の不確かさ」を挙げる。そして、性風俗従事者が性暴力被害に遭った時にすぐに助けを求められるような支援的な従事環境が欠如しており、性風俗従事者に対する偏見があるために公的機関に性暴力を訴えにくいといった公的機関の非支援的な状況を明らかにする。さらに、「性風俗従事者に対する性暴力」についての言説を考察することで、「性風俗従事者に対する性暴力」が何を根拠に不可視化されているのかを分析する。この考察によって、「性風俗従事者に対する性暴力」を不可視化する根拠として用いられているのは、被害者が実際に性風俗に従事しているか否かという事実だけでなく、対価を伴う性的行為や不特定多数との性的行為など、「性風俗に従事すること」が示唆する性質であることが明らかになる。つまり、「性風俗従事者である」という属性は、社会的に様々に意味づけられており、その様々な意味づけが、性風俗従事者に対して性暴力が行使され、そうした性暴力の存在や責任が不可視化される際に利用されているのである。

第5章では、「性風俗従事者に対する性暴力」が不可視化される要因を分析する。まず、第4章での考察を受け、「性風俗に従事すること」の社会的意味づけを分析する。「性風俗に従事すること」は「労働」とは見なされにくく、「労働」と見なされる時にも「低級の労働」

として位置づけられやすい。また、「性風俗に従事する」という経験は、性風俗従事者の性質や過去を表象する経験と考えられるのに対し、「性風俗を利用する」という経験は、「一次的な遊び」や「気の惑い」と考えられやすい。そのような「性風俗に関わること」の社会的地位や二重規範は、性風俗で起こりうる様々な不利益やその責任を「性風俗に従事することを選択した」性風俗従事者に帰す構造を形成している。「性風俗に従事すること」が否定的に意味づけられている社会においては、性風俗従事者に対する性暴力の責任が、性風俗従事者にのみ問われやすいことを明らかにした上で、さらに、そのような否定的意味づけを内面化することで、性風俗従事者自身が、性暴力を受けても自業自得として諦めてしまったり、性暴力を受けたことを語ってはならないと考えたりし、性暴力を不可視化してしまう危険性を考察する。

第6章では、これまでに検討した不可視化の要因を克服すること、すなわち、性風俗従事者に対する性暴力を可視化するための試みを検討する。まず、本研究でインタビュー調査した事例を基に、「性暴力を可視化する可能性」を考察する。その上で、性風俗従事者に対する性暴力を社会的な取組の中で可視化していく方法を検討する。ある属性に対する性暴力を可視化させるには、その属性に対する「性暴力」を概念化したり、概念を精緻化したりする必要がある。本研究では、対人的な性暴力と被害者を取り巻く環境との関係を指し示す概念として、「サバイバル・セックス」という用語を広義化することを提案し、これまで「性暴力」だと認識されていなかった出来事を「暴力」の一形態として組み込むことを試みる。また、性暴力を受けた性風俗従事者自身が性暴力を不可視化したり、被害について語る資格が無いと考えたりしないよう、他の性風俗従事者とのネットワークを形成したり、性風俗従事者に対する偏見に抗するためのアプローチが必要であることも提案する。さらに、性暴力が被害者の属性によって不可視化されることの無いよう、法制度の整備や被害者に接触しうる「専門家」（警察や弁護士、医療関係者など）の教育、性風俗の経営者やスタッフの意識改革が必要であることを提案する。最後に、性風俗に強制的に従事させられている場合や、性風俗を辞めたいと思っけていても諸事情で辞められないなど、性風俗に従事すること自体が「(性)暴力」になっている場合に性風俗から脱却する方法と、性暴力を行使しながらも免責されている「性暴力加害者」の更生、そして性風俗利用者による性暴力を防止する方法を提案する。

終章では、本研究で得られた知見を「本研究の意義」として大きく二つにまとめて説明する。本研究の意義は、性風俗従事者に対する性暴力の実態を明らかにしただけでなく、そのような対人的な性暴力が可能になる環境、そして、性暴力が不可視化される文脈といった、「性風俗従事者に対する性暴力」を成り立たせる一連の関係性を明らかにしたことである。また、本研究のもう一つの意義は、性暴力が被害者の属性を以って不可視化されることを分析し、そのような性暴力を可視化する方法を提示したことである。本研究は、性暴力が人と人との関係性の中で不可視化されることを考察するものであり、本研究から得られる知見は、「性風俗従事者に対する性暴力」を可視化するに留まらず、スティグマ化されることで

出来事を不可視化されてしまうような性暴力被害者たちが被害を可視化する方法を模索するための一助となるものである。終章ではさらに、本研究の限界と今後の課題を整理する。今後の課題として、性風俗における性暴力だけでなく、可視化されにくい性暴力を問題化し、多様な性暴力被害者がその属性によって沈黙することなく声を上げられるような空間を広げていくことの重要性を提示し、本研究を終える。